

第3章

昔話研究の最新動向について

～ヨーロッパ篇

高木 昌史

序

昔話 *Volksmärchen* は、文芸学のみならず、民俗学、社会史、フェミニズム、深層心理学、教育学、等々、様々な視点からのアプローチが可能な、否、むしろそれが要請される学際的な研究分野である。もちろん学際性を実り多いものにするのは容易なことではない。

こうした現況の中で、あらためてヨーロッパにおける最近の昔話研究の動向に目を向けると、そこでは、上に挙げた各種の学問が交錯する領域で、今日的な問題意識に基づく様々な試みがなされていることが分かる。とりわけ、毎年ドイツで刊行されている『ヨーロッパ昔話学会誌』*Veröffentlichung der Europäischen Märchengesellschaft*（以下 VEMG と略記）、および 2010 年現在、第 13 巻までが刊行されている空前絶後の『昔話百科事典』*Enzyklopädie des Märchens*（以下 EM と略記）は、昔話や伝説といった伝承文学の分野にも、時代の新しい潮流が次々に押し寄せていることを教えてくれる。

本稿では、前者『ヨーロッパ昔話学会誌』の最近十年間の内容と、それに関連した後者『昔話百科事典』の項目を参照しながら、ヨーロッパにおける昔話研究の最新動向を探ることにしたい。

1 『ヨーロッパ昔話学会誌』

同誌はヨーロッパ昔話学会 Die Europäische Märchengesellschaft の機関紙として、1980年に第一巻『昔話における人間像』が刊行されてから、2010年現在まで、すでに35巻を数えるが、最近十年間の「目次」を一覧しただけでも、「昔話」Märchenという研究分野が、人間と社会、歴史と芸術等を考える上に、いかに多くの寄与をしているかを示唆してくれる。そこで、初めに最近十年間の同誌の目次の中から、一般に関心を惹くと思われる論文を幾つか選抜・紹介し（以下便宜上、[1]～[10]と論文番号を付す）、次に、それに基づいて、最近の研究動向を分析することにする。

[1] 第26巻（2001年）『王様たちがまだいた頃』 Als es noch Könige gab

第1部「昔話と中世」

- 1 ハイנטツ＝アルベルト・ハイントリヒス「昔話と中世—昨日と今日」
- 2 クリステル・ビュックシュテーク「ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの『パルツィファル』における幾つかの昔話モチーフ」
- 3 レナーテ・ツェルガー「地獄の王からアルルカンまで。中世および昔話と伝説における悪魔」
- 4 ウルズラ・ハイントリヒス「中世の聖者伝および昔話と伝説の境界の詩学的規定の試み」
- 5 ハインリヒ・ディッカーホフ「乙女と愚者」

第2部「昔話における王と皇帝」

- 1 ハイツ・レレケ「グリム兄弟の『子供と家庭の童話集』における王と支配者像」
- 2 イングリト・トムコヴィアク「民衆物語における支配者像の両極性」
- 3 ルッツ・レーリヒ「『皇帝の新しい服』と笑い物にされた他の支

配者の物語」

- 4 ヴィルヘルム・ゾルムス「グリム童話における王と臣下」
- 5 ウルズラ・ハイントリヒス「昔話における人間の王道について」

[2] 第27巻(2002年)「昔話における男と女」Mann und Frau im Märchen

- 1 ルッツ・レーリヒ「昔話における男と女」
- 2 ヴィルヘルム・ゾルムス「笑話における夫婦喧嘩」
- 3 イングリト・リーデル「男と女はいかにして互いを救うことが出来るか」。グリム童話『ヨリンデとヨリングエル』と『池の中の水の精』の比較」
- 4 ヴェーラ・ツィングゼム「神話と昔話における女性的なものとの男性的なものとの象徴としての蛇と竜」
- 5 ハイデ・ゲットナー - アーベントロート「女神の娘、男の姉妹。魔法昔話における母権的範例」
- 6 ハインリヒ・ディッカーホフ「戦士 - 夢見る人 - 冒険者。伝説的的男子と昔話的的男子について」
- 7 ウルズラ・ハイントリヒス「昔話と近代文学における父親と母親」
- 8 ニーノ・カンパーニャ「バジールとネルッチにおける女性的要素と男性的要素」

[3] 第28巻(2003年)「昔話における願望／昔話における故郷と異国」
Der Wunsch im Märchen / Heimat und Fremde im Märchen

第1部「昔話における願望」

- 1 ウルズラ・ハイントリヒス「願望文学としての昔話」
- 2 イネス・ケーラー - ツェルヒ「昔話における命的な呪いに寄せて」
- 3 クリステイーネ・アルトマン - グラーザー「心理学的視点から見た昔話の申し子」

4 カタリン・ホーン「昔話の鏡に映した自由への人間的願望」

5 ルッツ・レーリヒ「満足は（不）幸せ」

第2部「昔話における故郷と異国」

1 ヒルデガルト・フォン・カンペ「ユグノー都市バート・カールス
ハーフェン。グリム兄弟におけるユグノー伝統」

2 マルガレーテ・メッケル「故郷と異国の媒介者としての昔話の語り手」

3 ヴィルヘルム・ゾレムス「ジントとロマの昔話と物語」

4 クリストフ・ダクセルミュラー「ユダヤの物語伝統における故郷と異国」

5 フランツ・フォネッセン「世界の果ての故郷」

[4] 第29巻（2004年）「言葉の魔術と語の魔法／夢の家と雲の城」

Sprachmagie und Wortzauber / Traumhaus und Wolkenschloss

第1部「言葉の魔術と語の魔法—昔話における言葉」

1 ハインリヒ・ディッカーホフ「初めに言葉ありき」

2 ウルズラ・ハイントリヒス「昔話における魔術的な詩句について」

3 ヘルガ・ブレックヴェン「決まり文句、詩句そして歌。東洋とヨーロッパの昔話における魔法の言葉」

4 カタリン・ホーン「その時、ヒラメが泳いで来て言った…。昔話における動物、植物そして事物の言葉」

5 ハインツ・レレケ「言語芸術作品としてのグリム兄弟の『子供と家庭の童話集』」

第2部「夢の家と雲の城—昔話とその空間」

1 デイヴィッド・ブラマイアーズ「英語圏の昔話における妖精との出会いの地上性と地下性」

2 ディーター・ヴィーデマン「〈日常は昔話の中では美しくなる〉。映画の観点からの昔話空間」

3 ベルト・リーケン「禁断の部屋のもティーフへの深層心理学的

アプローチ」

- 4 マルティン・フェルテス「〈空間の夢〉—絵画と建築における異界の建築学に寄せて」
- 5 クリスティン・ヴァルデツキー「夫婦の部屋—憧れの場、恐怖の場」

[5] 第30巻(2005年)「ホモ＝ファーベル—昔話と伝説における職人芸／失われた楽園—獲得された王国」Homo faber-Handwerkskünste in Märchen und Sagen/Verlorene Paradiese-gewonnene Königreiche

第1部「ホモ・ファーベル—昔話と伝説における職人芸」

- 1 ヘルガ・フォルクマン「糸を紡ぎ、運命を織る。昔話と神話における紡ぎと織物」
- 2 マルガレーテ・メッケル「ライト級の人物と陰気者—グリムにおける仕立屋と靴屋」
- 3 ハインリヒ・ディッカーホフ「職人芸と天の恩寵—昔話と人生における創造物と贈与物について」

第2部「失われた楽園—獲得された王国」

- 1 ザビーネ・ルトカート「自然との調和の中で—失われた楽園としての幼年時代」
- 2 フレデリク・ヘトマン「願望成就と空想の王国としてのケルトの異界」
- 3 オイゲン・ドレヴァーマン「失われた楽園あるいは〈人間を悪くするものは何か?〉」

[6] 第31巻(2006年)「昔話と神話における北方の声／昔話と魂」
Stimme des Nordens in Märchen und Mythen/Märchen und Seele

第1部「昔話と神話における北方の声」

- 1 カール＝エヴァルト・ティーツ「〈彼らには良い帆風が吹いた〉—ポンメルンとメクレンブルクの昔話における海のモティーフ」

- 2 ハイイツ・レレケ「グリムの昔話『マレーン姫』。伝承と意味」
- 3 オッター・ベツ「〈世界の呼吸を聴く〉—フィリップ・オッター・ルンゲと曙光」

第2部「昔話と魂」

- 1 ヴェレーナ・カースト「魂の滋養分としての昔話—深層心理学的視点」
- 2 ウルリヒ・フロイント「魂から魂へ—心理療法の媒体としての昔話」
- 3 アンゲリーカー・ベネディクタ・ヒルシュ「アモルとプシケー—魂の昔話」
- 4 ロートラウト・サエキ「沖縄における物語伝統、治癒そしてシャーマニズム」
- 5 ヨハネス・フィービヒ「成熟の道」

[7] 第32巻（2007年）「昔話における闇の力とそれを追い払うもの／昔話における法と正義」Dunkle Mächte im Märchen und was sie bannt/Recht und Gerechtigkeit im Märchen

第1部「昔話における闇の力とそれを追い払うもの」

- 1 ザビーネ・ルトカート「人生と昔話における闇と光」
- 2 ウルリヒ・フロイント「グリムの〈すべてが全く悪い、しかし〉。〈否定的な〉昔話の肯定的な作用について」
- 3 ウルズラ・ハイントリヒス「昔話における良い母親と悪い母親について」
- 4 イングリト・ヤコブセン「昔話における闇の援助者」
- 5 オッター・ベツ「〈それでもおまえは悔いていないのですか?〉。誘惑、闇の道そして禁断の部屋について」

第2部「昔話における法と正義」

- 1 ハンツ・レレケ「グリム兄弟と法」
- 2 ヘルガ・ツィツルシュペルガー「昔話を聴く際の青少年の正義感情について」

- 3 レナーテ・ツェルガー「東洋の昔話における裁判官と正義」
- 4 ユーディト・レヴェレンツ「法制史的資料としての昔話？」
- 5 フランツ・フォネッセン「昔話における正義と恩寵」

[8] 第33巻(2008年)「昔話、神話および現代における父親／昔話における城と宮殿、門と塔」Der Vater in Märchen, Mythos und Moderne/Burg und Schloss, Tor und Turm im Märchen

第1部「昔話、神話および現代における父親」

- 1 デイルク・ノヴァコウスキ「昔話における父親の威力と無力」
- 2 ハンリヒ・ディッカーホフ「父親の名のもとに。聖書と昔話における父親像とその批判」
- 3 ヴィルヘルム・ゾルムス「役立たずの父親」

第2部「昔話における城と宮殿、門と塔」

- 1 ハンス・イエルク・ウター「王宮と水晶宮」。民衆物語における魔術的世界」
- 2 バルバラ・ゴブレヒ「塔の中の誘惑。ラプンツェルとその姉妹たち」
- 3 ザビーネ・ルトカート「我々の中の壁と我々を囲む壁」
- 4 ハイッツ・レレケ「聖者伝、伝説および昔話における建築」
- 5 リカルダ・ルーカス「〈防御の塔が揺れ…黒い門が投げ出され、砕かれる〉。(魂の) 門を開く正しい瞬間について」

[9] 第34巻(2009年)「民話の 아일랜드／幸せな結末」Märchenhaftes Irland/Vom glücklichen Ende

第1部「民話のIreland」

- 1 ハインリヒ・ディッカーホフ「Irelandの物語の背景にある歴史。Irelandの昔話伝統の幾つかの背景に寄せて」
- 2 カリン・エル・モニール「女神としての女性、女性としての女神。Irelandの女性の顔」
- 3 パトリシア・リサイト「バンシー。Irelandの超自然の死の

使者とその伝承」

第2部「幸せな結末」

- 1 ヴィルヘルム・ゾルムス「結婚式 持続的な幸せの始まり？」
- 2 クリスティン・ヴァルデツキー「昔話の幸せ—子供の幸せ」
- 3 ウルリヒ・フロイント「暗黒の昔話も幸せにすることが出来る。
心理療法の隠喩としての昔話」
- 4 ベルト・リーケン「伝説における恐怖の結末」
- 5 アンゲリーカ・ベネディクタ・ヒルシュ「良い結末。良い死について昔話が教えてくれること」

[10] 第35巻(2010年)「奈落の淵の冒険／昔話におけるアウトサイダー」
Abenteuer am Abgrund/Außenseiter im Märchen

第1部「奈落の淵の冒険」

- 1 ウルズラ・ハイントリヒス「〈呪的逃走〉。脅威と救済」
- 2 リカルダ・ルーカス「〈内面に向かう秘密に満ちた道、我らの中の、あるいは何処にもない道〉(ノヴァーリス)。暗闇への旅の途上の案内者としての昔話、神話、夢」
- 3 ウルリヒ・フロイント「奈落の危険と確固とした自己信頼の間の昔話の主人公」
- 4 ウルズラ・トーマス「〈恐怖メルヘン〉。昔話における恐怖とその子供への影響」
- 5 アンゲリーカ・ベネディクタ・ヒルシュ「冒険と英雄—我らの代行人」

第2部「昔話におけるアウトサイダー」

- 1 ハンス・イエルク・ウター「盲人は目が二つある人よりも遠くを見る。民衆物語における障害者」
- 2 バルバラ・ゴブレヒト「ヨーロッパの魔法昔話における魔女、魔法使いの女および賢い女」
- 3 ウルリヒ・フロイント「『賢いエルゼ』あるいは、アウトサイダーはいかにして作られるか」

- 4 ザビーネ・ルトカート「昔話における愛されない子供たち、および彼らはいかにして道を見出すのか」
- 5 ハイッツ・レレケ「グリム兄弟の『子供と家庭の童話集』におけるアウトサイダー」

以上が最近十年間の『ヨーロッパ昔話学会誌』の論文題目（選）である。この資料を、まずはジャンル別に整理してみたい。

2 ジャンル別 (VEMG)

近年の学問が一般にそうであるが、特に口承文芸学においては、多種多様な学問が交錯する学際的な領域が開拓されつつある。それゆえ、分類は必ずしも簡単ではないが、以下においては一応、a 文芸学、b 民俗学、c 社会史、d 心理学、e 芸術学、以上五つのジャンルに属する項目を『ヨーロッパ昔話学会誌』の論文タイトルから拾い、簡単なコメントを付すことにする。

a 文芸学

- [1] 第1部 1 昔話と中世／2 パルツィファル論／3 中世の聖者伝
- [4] 第1部 「言葉の魔術と語の魔法」1～5
- [7] 第1部 「昔話における闇の力」1～5
- [9] 第2部 3 暗黒の昔話／4 伝説（恐怖の結末）
- [10] 第1部 2 ノヴァーリス（昔話・神話・夢）／3 奈落の危険／4 恐怖メルヘン

[コメント] 昔話と中世は重要テーマであるが、意外に研究が少ない。[1]の特集はその意味で貴重である。今後とも開拓が期待される分野であろう。昔話を〈言葉〉の視点から考察する [4] 第1部は、典型的な文芸学・言語学的アプローチであるが、例えば、ペローとグリム、あるいはバジーレとグリムの文体比較等、試みられるべき課題は多い。昔話や伝説における闇の部

分の考察（[7] 第1部、[9] 第2部、[10] 第1部）は魅力的で、ジャンル論および人間の心の深層部分に光を当てる心理学と密接に関連している。

b 民俗学

- [1] 第1部 3 悪魔／5 患者
- [2] 4 蛇と竜
- [3] 第1部 2 呪い
- [4] 第1部 4 動物・植物・事物の言葉 第2部 1 妖精
- [5] 第2部「失われた楽園」1～3
- [6] 第1部 1 海のもティーフ 第2部 4 沖縄（シャーマニズム）
- [9] 第1部「民話のアイランド」1～3
- [10] 第1部 1 呪的逃走 第2部 2 魔女、賢い女

[コメント] 悪魔、患者、魔女、賢い女、妖精、等（[1]、[4]、[9]、[10]）は、ヨーロッパ中世の社会や宗教の問題を考える上に不可欠の項目であるが、それらは同時に、人間性の普遍的な次元に深く根を下ろすテーマでもあり、興味は尽きない。蛇と竜（[2]）、海（[6] 第1部）、シャーマニズム（同第2部）は文化史あるいは文明史の問題として、近年特に注目を浴びている（『龍の文明史』等）。失われた楽園（[5]）は『旧約聖書』の物語以来、人類普遍のテーマであろう。また呪い（[3]）と呪的逃走（[10]）は、言うまでもなく、昔話の最重要モチーフに数えられる。

c 社会史

- [1] 第2部 1～5 支配者（王と皇帝）
- [2] 男と女（母権制、等）
- [3] 第2部 1～5 故郷と異国
- [5] 第1部 1～5 職人
- [7] 第2部 1～5 法と正義
- [8] 第1部 1～5 父親像
- [10] 第2部 1～5 アウトサイダー

[コメント] 社会史に属するものは幅広く多様だが、中でも女性と男性、あるいは母権的なものと父権的なもの（[2]、[8]）は、心理学や教育学、そしてフェミニズムとも絡んで、現代社会の諸問題を読み解く一種のキーワードとなっている。また支配者（[1]）は、法と正義（[7]）のテーマとも関連して、社会の構造を考える上に、時（中世等）を超えた問題と言える。故郷と異国（[3]）およびアウトサイダー（[10]）は、社会と歴史を全体的かつダイナミックに捉える際の重要テーマに属している（M・リューティ『民間伝承と創作文学』所収論文等）。職人（[5]）は、社会の特性を映し出すモメントとなる職業集団で、例えば、グリム童話は豊富な資料を提供している（[5] 第1部2等）。

d 心理学

[3] 第1部1～5「願望」

[4] 第2部 3 禁断の部屋（深層心理学）

[6] 第2部 1 魂の滋養分、2 魂（心理療法）、4 治癒、5 成熟

[7] 第1部 5 禁断の部屋（深層心理学）

[8] 第2部 5 魂の門を開く

[9] 第2部 3 暗黒の昔話（心理療法）

[10] 第1部 4 恐怖メルヘン（子供への影響）

[コメント] 人間は何らかの願望によって生きている。願望は人間存在の根本的エネルギー源である。[3] 第1部はこの視点から昔話の諸相に光を当てた貴重な特集である。VEMGには心理学的考察が多々含まれているが、深層心理学では「禁断の部屋」のモチーフ（[4] [7]）、「魂の門」という意味深い発想（[8]）が考察され、他に心理療法（[6] [9]）や治癒と成熟の問題（[6]）、また教育心理学的テーマ（「魂の滋養」[6]、「子供への影響」[10]）等、いずれも実践的な性格を持っている。現代社会において、一般にますます関心と呼ぶ分野となっている。

e 芸術学

[4] 第2部 2映画、4絵画と建築

[6] 第1部 3絵画（ルンゲ）

[8] 第2部 1王宮・水晶宮、4建築

[コメント] 芸術に関しては、VEMG 第21巻『昔話と芸術』Das Märchen und die Künste 特集でも扱われたが、例えば、映画（[4]）とメルヘンは意外に未開拓な分野である。また絵画や建築を昔話の研究に隠喩として応用する方法（[4] [8]）は、いま一つの可能性を示している。グリム童話で有名な『漁師とその妻』や『ねずみの木の話』をポンメルン地方で最初に採集した画家ルンゲ（[6]）についても、昔話と色彩等、探求されるべき課題は多い。

次に、以上五つのジャンルの各項目を、『昔話百科事典』から収集・紹介したい。

3 『昔話百科事典』から

『昔話百科事典』Enzyklopädie des Märchens (EM) は、1977年に第1巻が刊行されてから、2010年現在、第13巻 Verf の項まで進捗しつつある。このEMは「物語の歴史的・比較的研究のための辞典」を副題として、現代の学問的動向を踏まえ「学際的」interdisziplinär かつ「全世界的」weltweit であることをモットーにしている。以下、そこから『ヨーロッパ昔話学会誌』掲載の論文内容に対応する項目を、前記五ジャンル別に紹介する。

a 文芸学

EMには中世 Mittelalter の項目はない。その代わりに、中世受容 Mittelalterrezeption（第9巻）の見出しで、人文主義の時代から現代までの中世〈受容〉がごく簡潔に記されている他、バルツイファル Parzival（第

10巻) やジークフリート Siegfried (第12巻) 等、中世文学を代表する様々な人物、またファブリオー Fabliau (第4巻) 等、中世の伝承文学に関する項目が収録されている。昔話 Märchen (第9巻)、伝説 Sage (第11巻)、聖人伝 Legende (第8巻) 等、各ジャンルの叙述は詳しく、さらに「恐怖メルヘン」 Schreckmärchen や「アンチーメルヘン」 Anti-Märchen 等、見逃せない項目が収録されている。

b 民俗学

動物や植物、例えば鴉 Rabe (第11巻) や蛇 Schlange (第12巻)、あるいは百合 Lilie (第8巻) や薔薇 Rose (第11巻) 等の他、空想上の動物として竜 Drache (第3巻) についての項目があり、また魔女 Hexe (第6巻) や悪魔 Teufel (第13巻)、妖精 Fee (第4巻) 等、昔話に頻繁に登場する存在が詳述されている。社会史とも関連する項目としては、例えば、結婚式 Hochzeit (第6巻)、母権制 Matriarchat (第9巻) と父権制 Patriarchat (第10巻) などが貴重な情報を与えてくれる。他に、楽園 Paradies (第10巻) やアイルランド Irland (第7巻) 等の国、そして呪的逃走 magische Flucht (第9巻) といった昔話の最重要モチーフが解説されている。

c 社会史

社会を構成する男 Mann (第9巻) と女 Frau (第5巻) —この二項目は幾つかの類型に分けて特に詳しく叙述されている—、また王(妃) König(in) (第8巻)、支配者 Herrscher (第6巻) 等の身分や、農夫 Bauer (第1巻) や職人 Handwerker (第6巻) といった職業についての叙述も詳しい。後者では、さらに粉屋 Müller (第9巻) や仕立屋 Schneider (第12巻) 等が別個に記述されている。社会の秩序を支える法 Recht (第11巻) や正義 Richtigkeit (同) 等の他、社会の周縁あるいは枠外に位置する(とされる)アウトサイダー Außenseiter (第1巻) は、ハンセン病 Aussatz (第1巻)、乞食 Bettler (第2巻)、刑吏 Henker (第6巻)、身体障害者 Krüppel (第8巻)、売春 Prostitution (第10巻)、皮はぎ職人 Schinder (第12巻)、ジプシー Zigeuner(in) (未刊) 等の項目に分類・解説されている。(特に封建

制の) 社会の上層と下層、中心と周縁、内部と外部、そのすべてを包含する昔話は、歴史的資料としても看過できないジャンルなのである。

d 心理学

(深層) 心理学の創始者 S・フロイト Freud (第 5 卷) や集合的無意識で有名な C・G・ユング Jung (第 7 卷) の項目の他、このジャンルでは、心理学 Psychologie (第 10 卷)、心理療法 Psychoterapie (同)、エロス Eros (第 4 卷)、元型 Archetypus (第 1 卷)、個体化 Individualisierung (第 7 卷) 等の基本概念の解説がなされている他、恐怖メルヘン (第 12 卷) や魂 (同) 等、心理学的要素を含む項目が収録されている。それらは、専門家はもちろん、むしろ昔話研究に携わる一般読者にとって欠かせない。

e 芸術学

絵本や絵画、映画やオペラといった、芸術の各ジャンルと昔話の関係については、EM 中の絵物語 Bilderbogen (絵の典拠 Bildquellen 第 2 卷)、映画 Film (第 4 卷)、オペラ Oper (第 10 卷) 等の項目で詳しく解説されている。映画では、(東西) ドイツ、チェコ (スロヴァキア)、ロシア (旧ソ連)、イギリスといった国別の紹介が成されている他、ウォルト・ディズニーのメルヘン映画に関する記述がある。その他、VEMG の章で見たように、絵画や建築が、隠喩的な要素としてメルヘン研究に応用されていることを付言しておきたい。ただ、昔話と芸術の諸分野との関係については、EM の項目は控え目で、研究はむしろ今後の課題なのかも知れない。

4 総合分析

以上、VEMG および EM から、ジャンル別に見た最近の昔話研究を紹介してきたが、前者 VEMG 所収の個々の論文においては、実際には、様々な要素が複合的に組み合わせられている。そこで最後に、総合的な観点から、あらためて VEMG を基礎資料に研究動向を分析することにした。

まず、最近の研究の特徴の一つとして、社会構造への眼差しが挙げられる。特に中世との関係で、支配者と被支配者の問題が注目されている。支配者としての「王と皇帝」を特集した [1] 第2部では、グリム童話(KHM)における支配者像 (1)、王と臣下 (4) がテーマ化されている。この視点を導入することによって、KHMの世界は、社会を構成する二つの層（支配者 - 被支配者）の力学関係から再検討されることになるが、そこに昔話の重要な機能 = 距離感が垣間見えてくる。すなわち、昔話は支配者（王）を絶対視するのではなく、むしろ被支配者（臣下）との関わり方からそれを相対化し、ある場合には「笑い物」(3) にさえするのである。この距離感によって、昔話は封建体制下の社会ばかりではなく、それを超えて、より普遍的な次元での社会構造の在り方を考察する手掛かりを与えてくれることになる。民主的な社会においても、立場的に、社長と社員のような関係性は存在するからである。この場合、社会構造とは別次元での人間の「王道」Königsweg (5) は究極の観念となるであろう。人間と人間の現実的な関係性を超えた何かをそれは指し示すからである。

社会構造と関連したもう一つのテーマとして、アウトサイダー ([10] 第2部) が注目される。社会を中心と周縁、内部と外部に分けるとすれば、後者の系列に属するとされるアウトサイダーの問題は、いつの時代、どこの世界においても重要かつ深刻である。社会における差別や排除は、ヨーロッパ史では、例えば、魔女（裁判）に典型的に示されているテーマであるが (2)、ジント（ドイツ系ジプシー）とロマ（非ドイツ系ジプシー） ([3] 第2部—3) あるいはユダヤの物語（同一—4）は、「故郷と異国」の問題であると同時に、アウトサイダーのテーマ圏にも属している。昔話がたんなる空想物語ではなく、何らかのかたちでの現実の反映であるとするならば（L・レーリヒ『昔話と現実』、M・リューティ『民間伝承と創作文学』等）、そこには当然、多くの問題群が内在している。以上、巨視的なアプローチとは別に、KHMの笑話『賢いエルゼ』をテキストに「アウトサイダーはいかにして作られるか」を考察した論文 ([10] 第2部—3) は、差別や排除が生まれる場 = 契機を微視的に、しかし鋭く分析したものとして貴重である。これら以外にも、母権制や父権制、男と女 ([2] / [8] 第1部) も、ここでは措くが、社会

構造の問題圏に属する重要テーマである。

以上、社会構造を映し出すテキストあるいは資料として、昔話を考察する研究動向は、近年ますます盛んになっている。

他方、人間存在の闇の部分に光を当てる論考も、最近の昔話研究に特徴的である。[6] 第2部「昔話と魂」所収の論文では、「魂の滋養」、「心理療法」あるいは「治癒」といった用語が示しているように、昔話のいわば回復力がテーマとなっているが、[7] 第1部あるいは [9] 第2部、[10] 第1部は、昔話における、また人間心理における「闇の力」*dunkle Mächte* をクローズアップした特集として興味深い。〈否定的〉昔話、悪い母親、闇の援助者、誘惑（禁断の部屋）、暗黒の昔話、恐怖メルヘン等、一見、まさしく否定的な要素が、子供にとって、また一般に人間にとって、いかに肯定的・積極的な機能を持っているか、その逆説的なメカニズムに、これらの特集は分析のメスを入れている。一時あるいは現在も、「本当は怖い」が流行語になったが、昔話には実際、人間存在の、あるいは人間心理の闇の部分の色濃く反映している。しかし肝心なのは、それをエログロ・ナンセンスの次元で興味本位に捉えるか、実存の問題として真摯に受け止めるか、読者あるいは研究者の態度如何であろう。影が光に反転する微妙かつ複雑な経路を、昔話はその一見単純な文体の背後に垣間見させていることを、前記の論文群は、深層心理学を援用して見事に分析している。

最近の昔話研究は、社会的な水平的広がりとは別に、人間を深層心理学的に、垂直に掘り下げる方向でもいよいよ進化しているようである。

第三に、最近の昔話研究において目立つのは、メタフォリカル（隠喩的）な研究である。民俗学や心理学、また芸術学といった枠を超えて、昔話における空間、事物、動物等を隠喩 *Metapher* として把握する論文群である。[4] 第2部「夢の家と雲の城」所収の論文はその代表的な例であろう。4「〈空間の夢〉—絵画と建築における異界の建築学に寄せて」は特に、昔話研究の、ある意味、真髄を示している。というのも、メルヘン *Märchen* には語源に由来する「短い物語」*Mär-chen* < *maerlin* の意味があるが、それとは別に、ドイツ語の形容詞 *märchenhaft* 「メルヘンのような」には、空想あ

るいは夢の性格が不可欠的な要素として内在しているからである（M・リュウティ『メルヘンへの誘い』）。捉え難い空想や夢の空間構造に本格的なアプローチを試みたこの論文は、[8] 第2部の1「王宮と水晶宮」、2「塔」、3「我々の中の壁と我々を囲む壁」、また5「防御の塔」「黒い門」等、とともに、昔話における隠喩的構造分析に新たな可能性を拓くものとして注目される。

以上、社会構造の分析、深層心理学的考察、そして隠喩論的アプローチなどは、最近の昔話研究の著しい動向と言ってよいであろう。留意すべきは、これらの研究が、例えば、「防御の塔が揺れ…黒い門が投げ出され、碎かれる」（[8] —5）のように、建築に深層心理学的な要素を導入するといった具合に、複合的な組み合わせを方法論として駆使している点である。現在の学問におけるいわゆる〈学際性〉はこうした動向に明瞭に見て取れるのである。しかし、そうであればこそますます、逆に、文芸学、民俗学、社会史、心理学、芸術学といった、ある種明確な枠組みを持つ学問の領域を再確認しながら、それらをどのように組み合わせれば、昔話の世界を把握する上に有効かという方法論の基本に立ち返ってみる必要もあるのかも知れない。いずれにせよ、口承文芸学の一環としての昔話研究を取り巻く状況は、今日、ますます複雑化しているが、見方を変えれば、それだけ可能性は広がっているとも言える。『ヨーロッパ昔話学会誌』はそうした現況を如実に示しており、その現況に分け入る導きの糸として、『昔話百科事典』は今後とも大いに活躍してくれるにちがいない。

結語

『ヨーロッパ昔話学会誌』VEMG 最近十年間の内容を概観すると、人間世界の様々な局面における相反する力学が、収録論文の中で展開され、論究されていることが分かる。例えば、王と臣下（第26巻）、男と女（第27巻）、父権と母権（同）、共同体とアウトサイダー（第30巻／35巻）、光と

闇（第32巻）、故郷と異国（第28巻）等々である。この力学が、文芸学、民俗学、社会史、心理学、芸術学といった諸学問の交錯する領域で繰り広げられている現状は、換言すれば、昔話というジャンルの包容力の大きさを示している。

一方、『昔話百科事典』EMは、現代的な問題意識から、学際的かつ全世界的な規模で、昔話と人間・社会・自然との関係を考察する手掛かりを、キーワードを媒介に、最新の文献案内を付して、解説してくれる。以上、VEMGとEMから得られる情報の豊かさはまさしく計り知れない。

ところで、スイスの口承文芸学者マックス・リューティはその著書『ヨーロッパの昔話』Das europäische Märchen (Form und Wesen, 8. Aufl., Francke Verlag, Tübingen, 1985 [47])の中で、昔話の重要な特性として「含世界性」welthaltigを挙げる。彼によれば、昔話は「人間存在のあらゆる本質的要素」を映し出す、「言葉の本来の意味で世界を包含する文学」に他ならない。個人的な出来事と公的な出来事、此岸と彼岸、良い行為と悪い行為、同情と冷酷、慎ましさと高慢、王侯貴族と庶民、罪と罰、幸運と不幸等々、昔話は世界のすべてをその中に内包する広さと深さを備えた文学ジャンルなのである。VEMGとEMを概観した我々にとって、リューティの言葉はいよいよ説得的に響くのではあるまいか。

テキスト

* Veröffentlichung der Europäischen Märchengesellschaft

Bd. 26 Als es noch Könige gab, Heinrich Hugendubel Verlag, Kreuzlingen/München, 2001.

Bd. 27 Mann und Frau im Märchen, 2002.

Bd. 28 Der Wunsch im Märchen/Heimat und Fremde im Märchen, 2003.

Bd. 29 Sprachmagie und Wortzauber/Traumhaus und Wolkenschloss, Königfurt Verlag, Krummvisch bei Kiel, 2004.

Bd. 30 Homo faber-Handwerkskünste in Märchen und Sagen/Verlorene Paradiese-gewonnene Königreiche, 2005.

Bd. 31 Stimme des Norden in Märchen und Mythen/Märchen und Seele, 2006.

- Bd. 32 Dunkle Mächte im Märchen und was sie bannt/Recht und Gerechtigkeit im Märchen, 2007.
- Bd. 33 Der Vater in Märchen, Mythos und Moderne/Burg und Schloss, Tor und Turm im Märchen, 2008.
- Bd. 34 Märchenhaftes Irland/Vom glücklichen Ende, 2009.
- Bd. 35 Abenteuer am Abgrund/Außenseiter im Märchen, 2010.

* Enzyklopädie des Märchens, Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung, hrsg.von Kurt Ranke, Walter de Gruyter Verlag, Berlin/New York Bd. 1, 1977/Bd. 2, 1979/Bd. 3, 1981/Bd. 4, 1984/Bd. 5, 1987/Bd. 6, 1990/Bd. 7, 1993/Bd. 8, 1996/Bd. 9, 1999/Bd. 10, 2002/Bd. 11, 2004/Bd. 12, 2007/Bd. 13, 2010.

注 参考文献一覧と注釈は、「報告書」の性格上、本稿では省略する。